

大喜証

久田 房枝

凡そ二十七年前のことです。

私はあと一年で五十歳。このまゝ年を重ねることに、日々不安と不足を感じている時期でした。

或る日、市の広報に介護に関する講座があるのを見つけました。

今の私の気持を払拭するには、この講座を受けることだ、という思いに駆られ、早速受講し、福祉活動に対する心構え、実技など勉強しました。

その後、何処でボランティア活動を始めようかと迷っていましたが、小学校時代からの友人に偶然、町の中で出会ったのが幸いでした。

丁度一年前、友人は私と同じ講座を受け、十名ほどで「紫陽花会」と名付けたボランティアグループを立ちあげ、シニアホームで活動を始めていたのです。

早速仲間に加えて頂き、私の思いが叶う事になりました。

紫陽花会の活動は特別養護老人ホームに於てでした。

勤め人である私が活動するには、都合のよい場所でした。

グループは、年間十三回の定時活動日を計画、午前十時から午後三時まででした。

そして、仲間の中には更に毎週一、二回個人でこのホームで活動している人もいます。

活動日はお弁当持参です。

昼休みには互いに悩み事、悲しみ、喜びなどを語り合い、時には同情し、励まし合い、助言などする楽しい場ともなります。

勿論、これは現在も続いています。

当初は利用者のシーツ交換、部屋の掃除、外出時の付き添いなど多様でした。

私達が歳を取るとともに、活動内容は変化し、主にお話し相手、衣類の繕い、工作や催し事の手伝いなどとなりました。

それは、利用者の介護度が高く、自立歩行が困難になった方が多くなったからでした。

一昨年のことです。私は特養ホームへ新年の挨拶にかけました。

二階の利用者の数人が、私の顔を見て

「今年もよろしくね」と声をかけて下さいました。私は、うっかり

「お餅を召し上がりましたか？」と聞いてしまつて、はつとしました。

「今年はお餅がでなかつたの。寂しいね」

力のない声が返つてきました。

毎年、お餅を喉に^{つか}痞えさせての事故が、新聞やテレビで報道されます。

このホームでも事故を避けるため、お餅は止めざるを得なかつたのでしよう。

ホームの単調な生活の中で、利用者が一番楽しみにしているのは食事です。

栄養面、季節の食材、色どりなど工夫され少しでもおいしく食べて頂くことは、担当者を始め職員一同が当然考えている事だと思います。

しかし、利用者にとつて、全て形のない食物は、食欲を減退させる一因ともなりがちのようです。

「年を取るの嫌だねー」と富子さん。

私は三人の利用者の間に座り、何かお話しをしましようかと言うと、三人はうんと頷きました。

…昔はね。とし神様がお正月になると、みんなに一つづつ、としを配って歩いたんですって…

三人はふーんと真剣に聞いています。

…日野の平山の方に元気なおばあさんがいて「わたしゃ、もうとしを取るの御免じゃよ。とし神様のお出では迷惑じゃ」といい、大晦日の夜、ござと大きなオニギリを持って、お山へ上って行つたとさ…

「へえー。元気だねー」と道子さん。

…そしてお山の上の大きな杉の木の根元に、ござをひいて

「やれやれ。ここまでくれば大丈夫。とし神様にも見つかるまい」と安心して、風呂敷に大事に包んできたオニギリを、美味しそうに食べたんですって…

「寒いのに大丈夫かな？」

友^{ども}さんは現実とお話しの世界が一緒になって、話しの中のおばあさんを案じました。

…少し寝た時、おばあさんの体を揺する者がいたそうじゃ。おばあさんは、そーと細く身を開けて見て、びっくり仰天。とし神様がニッコリ笑っていたとさ…

「へえー。ほんと」と道子さんはニコニコと笑っていました。

…とし神様は言ったそうじゃ。

ぐやれやれ。やつと見つけた。なかなか見つからなかったから、年を授けるのが遅くなつて済まんなー。今年はな、まだ年が十も余よっているから、みんなお前さまに置いておくでよ」というと、何時のまにかとし神様は消えてしまったんじゃとさ…

三人はうふふふと笑いました。

…おばあさんは、いっぺんに八十すぎになって、お正月の朝になると、お山から杖を歩いて里へおりてきたとさ。ハイ、おしまい…

「たのしそうですね」と笑顔の看護師さんが通り過ぎました。

「欲張ってはいけないね」と富子さんがいい他の二人が「うん」と頷いていました。

利用者とのふれあいは、私自身も教えられる事が多く、楽しみでもあります。

いつの間にか、私もすっかりおばあさんの域に入りましたが、去年は認知症サポーターのための講習会に参加しました。そして、私の自宅前で道に迷った方をサポートする結果につながりました。

眼も悪くなり時々眼科に通院していますが或る日、待合室で自分の座る席を探していました。

やっとみつけた席はテレビのすぐ前。三人掛けの椅子でした。

私は腰かけて、左手側をみると血圧計が目にとまり、思い切って計ってみました。

数字を見て、「まあまあだ」と、心で呟くと目の前に男性が手を伸し、真ん中の席に滑り込んできました。

「すみません。そこ空いてますか？」

スマートな方でした。ハアハアいいながら私の血圧の記録を覗き込みながら

「まあいい数字ですね。下がちょっと高いかな」と診断されたのには驚きました。

男性は自分が兵隊に取られたこと、戦争直後の苦労話などいつ果てるともなく続きました。

男性には話す相手が必要だったのかも知れません。時間が許す限りお相手をすることにしました。そのうち、私の診察の番となり、「どうぞ、好きな物を召し上って、お元気で経過して下さい。ご自分のことを自分でできるなんて素晴らしい事です」

真面目そうなお顔が綻び、笑顔を見せてくれました。

多くの人は、見知らぬ人に話しかけることには、時には勇気が必要です。

人から話しかけられるのは、私が頂く大きな喜証だと思えるようになりました。

紫陽花会の仲間も歳を取りましたが、お互い励まし合い、助けあって活動三十年を目標に、元気である限り活動を続けたいと思う日々です。